

2023 年度の教育活動等に対する学校評価書

2024 年 3 月 6 日
 学校法人聖隷学園
 聖隷クリストファー大学附属
 クリストファーこども園
 園長 武田 真理子
 聖隷クリストファー大学附属
 クリストファーこども園
 学校関係者評価委員

1. 園目標

<愛>	神様と周りの人に愛されていることが分かり、自分を大切にすることを目指す。
<思いやり>	様々な人々との関わりを通して、思いやりの気持ちを育み共に生きる喜びを知る。
<たくましさ>	自然の中で思いきり遊び、感性やたくましい心と体を育む。
<いのち>	食に関わる体験を積み、いのちがつながりあい、支えられていることに感謝する。
<表現力>	自ら様々なことに取り組み、考えたり表現する力を身につける。
<自立>	生活に必要なことが分かり、自分から身に付けようとする。

2. 2023 年度の重点課題（事業計画）

<p>2023 年度重点目標</p>	<p>① 建学の精神の理解とキリスト教保育に基づいた園運営及び教育・保育活動の実施 ② PYP（国際バカロレア初等教育プログラム）認定に向けて（3年計画の3年目） -PYP 認定申請のスケジュール作成（随時見直し・更新）・実施 -職員に対する PYP 研修の実施、異文化・異言語プログラム（活動内容）と環境（外国人講師の配置、室内環境等）の見直し -小学校との PYP 教育プログラムの連携と協働 ③ 3 歳児の定員確保（満 3 歳児クラスの充実）、情報の内容に応じた広報媒体の見直し -専門的知識・技術を活用した広報、情報発信を行う ④ 子育て支援環境の充実、職員研修の実施 -0-1 歳児の入園につながる子育て支援の立案と実施 ⑤ 既存施設・設備の使い方の見直しと 0-1 歳児棟の増築検討（園舎・園庭等を含めた全体的な見直し～2024 年度まで継続、2025 年度工事予定） -満 3 歳児定員増を踏まえた全体的な園舎・園庭等の使い方の見直し -0-1 歳児保育・環境の見直し⇒0-1 歳児棟増築の検討 ⑥ 森を活用した自然活動の実施（3年計画の1年目） -課内イングリッシュ活動を森で実施し、探究的な学びを深め、SDGs への関心を高める ⑦ 園庭の再構成（3年計画の2年目） -園舎増築を見据えた園庭整備の計画作成と実施 -現状設備の点検及び危険箇所等の整備（継続） ⑧ ICT を活用した広報の充実 -Instagram の発信、内容の充実 -ホームページの見直し、英語版の作成 ⑨ 園で定めた研修テーマに係る研修及びキャリアアップに係る自主的な研修の受講を支援する。 -園で定めるテーマに関する研修への職員の積極的な派遣 -クリストファー大学主催の IBEC プログラムへ職員の受講促進 -キャリアアップに係る自主的な研修の受講の支援（費用、勤怠の調整等）</p>	<p>重点目標に対する評価</p>	<p>① 一人一人の子どもを尊重し、具体的な例をあげて年度初めに職員ミーティングを行い、それらを実践できるよう互いに声を掛け合うことができた。 ② 認定訪問時には、小学校と協力して言語ポリシー等の作成を行い、出来上がったものを保護者にも公開した。 ③ 入園説明では、入園の時期がそれぞれ異なるため、大きな説明会以外にも、小さな説明会や案内を複数回に渡り行った。満 3 歳児と 3 歳児の募集活動を並行して行い、園児獲得につなげていきたい。 ④ 実施回数を増やし、本園の特色を活かしたイベントの実施で利用者が定着しつつある。地域に信頼される「かかりつけの広場」として活動を続けていきたい。 ⑤ 園舎増改築計画に向け、保育内容方法等を整理し、本園の保育に合わせた建物のデザインの検討を進めた。 ⑥ 森の活動では、季節に合わせたアクティビティを行い、森で出会った様々な登場人物を、地図や季節ごとのグラフに書き起こし、森の 1 年間を探究することが出来た。 ⑦ 今年 1 年の園庭でおこった怪我やヒヤリハットを集計し、危険箇所の洗い出しと点検、整備を行った。 ⑧ 広報の専門スタッフがブログとInstagram で活動の様子を発信した。 ⑨ 職員 7 人が IBEC プログラムを受講し、専門的な学びが他の職員にも共有され園の活動に活かされた。</p>
--------------------	--	-------------------	--

3. 自己評価結果とそれに対する学校関係者評価（※評価は、○・・・目標どおり達成できた、△・・・十分に達成できていない・次年度の課題である、で表している。）

重点課題	基本目標	行動目標	個別行動目標	具体的な取り組み	自己評価	評価のポイント	学校関係者評価	評価の要点・意見等
教育・保育方針	「自分のようにあなたの隣人を愛しなさい」の理念に基づき、スタッフ（教職員）が一致協力して、個々のこどもの発達段階や状況に応じたきめ細やかな援助・指導を行い、健やかな心身の成長発達を育む。	キリスト教保育について理解を深める 重点項目①	聖書(み言葉)について学ぶための機会を設ける	・各保育教諭が聖書物語を子ども達に語る事ができるように、研究・準備をする。 ・自主的な聖書の学びの会を持つ。 ・基本理念をよく理解し、キリスト教保育に基づいた教育保育活動や園運営に取り組む。	○	・一人一人の子どもを尊重し、具体的な例をあげて年度初めに職員ミーティングを行った。それらを実践できるよう互いに声をかけあった。 ・今年度は園の宗教副主任が不在であったため、遠州教会の牧師先生に園児の礼拝を担当して頂いた。子どもたちに向けた分かりやすいメッセージは、同時に職員にも届き、恵みと学びの時となった。今年度は職員対象の聖書研究の時間は持てなかったが、来年以降は検討していきたい。	○△	・キリスト教保育についての理解は、毎年の積み重ねの中で醸成されると思うので、単年度では評価しづらい部分があり、今年度計画どおりに取り組めなかった事情もお察しするが、職員対象の聖書研究の時間が持てなかったことは、当該年度としては、次年度以降への課題となったと理解しました。 ・年齢に合わせた内容・長さで、幼い時期に聖書のお話に親しめるよう、引き続きお願いいたします。

重点課題	基本目標	行動目標	個別行動目標	具体的な取組み	自己評価	評価のポイント	学校関係者評価	評価の要点・意見等
教育・保育方針	「自分のようにあなたの隣人を愛しなさい」の理念に基づき、スタッフ（教職員）が一致協力して、個々のこどもの発達段階や状況に応じたきめ細やかな援助・指導を行い、健やかな心身の成長発達を育む。	少人数保育、専門性の強化を実施する。	スタッフ間の連携・チーム作り	<ul style="list-style-type: none"> 専門性や得意分野に合わせて各リーダー、メンター、教諭、クラスリーダー補助（準職員）、保育補助スタッフ（無資格）の業務・役割の明確化を行う。（継続） ICTの専門的知識・技術の導入と活用 職員のICTスキルアップのための研修を行う。 保育補助スタッフの充実を図る。（ICT、記録スタッフ・無資格者の資格取得応援） 	○	<ul style="list-style-type: none"> 今年は、保育補助スタッフの力が大いに発揮され、保育の充実や広報活動に繋がった。これまで行事等で流すスライドショー作成やブログ配信など、クラス担任はなかなか手が届かなかった部分を、補助スタッフが専門的な知識と技術を持ってサポートした。プレイデーやクラス懇談などで、保護者と共有することが出来た。 未満児クラスの連絡ノートにiPadを導入したところ、徐々に効率的な事務作業を行えるようになってきている。 	○	<ul style="list-style-type: none"> ここで評価されている内容は、実際には、スタッフの資質向上・連携の項目の方がいいのではないかと感じた。ICT・記録へ対応など保育補助スタッフの担える範囲が広がったことは、資質の向上ではなく教育・保育方針の項目になるのだろうか。結果的にそれらの取り組みから、教育・保育方針について、保護者との共有することにつながったことが評価のポイントであろうか。 未満児クラスの連絡ノートにiPadを導入されたとのこと、こうしたICTを導入しての仕事の効率化は大切である。今後、ますますのICT活用を進めていって、先進事例としてこの地域の各園に広められるようにして欲しい。
特色ある保育の展開	戸外や自然の中でのダイナミックな体験活動ができるよう、計画・実践・評価を行う。	安全かつチャレンジできる園庭を造る 重点項目⑦	園庭の再構成（3年計画の2年目）	<ul style="list-style-type: none"> 講師（井上寿先生）の年間実施計画を立て、園庭の整備及び時期活動計画の策定をする。（2023/5/2、7/28、2024/2/10） 園舎増築を見据えた園庭整備の計画を作成する。 保護者の理解と協力を得るように働きかける。研修及び整備のための作業（園庭ボランティア）を行う。（年3回） 他園への見学や共同での研修を通して、園庭の土や砂の扱い方を学び、環境に配慮した循環する園庭作りを検討する。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 2年後の増改築計画に向け、井上先生を中心に、やりたい保育に合わせた建物のデザインを考え始めた。また、法人にも協力を得ながら、保育内容方法等を整理し、現在準備を進めているところである。 今年1年の園庭でおこった怪我やヒヤリハットを集計した。2月にはデータに基づき、安全について今一度話し合い、見直しを行った。 年度初めに、空気と水を含む土作りを目標に、土壌改良を行った。その結果園庭の水はけがよくなり、植物にも良い影響を及ぼしている。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 保育環境として、自然とのふれあいを視野に入れ、増改築計画に当たって園舎のみならず、園庭の大切さを視野に入れて、取り組んでおられることは素晴らしいと思った。あわせて、他園からの学びの場、保護者の理解を深めるための働きかけ、安全性への配慮につながる具体的な検証作業がなされているところに、計画を実現するための取り組みのきめ細かさを感じます。 保育環境の整備は質の高い保育・教育を実現する上で非常に重要である。保護者や質の高い保育施設建築のノウハウある業者・設計士も交えて一つのプロジェクトとして進められたらいいのではないかと思う。国内外の先進事例に触れて、互いの夢を共有しながら実現されることを期待する。
		子どもたちのセンス・オブ・ワンダーを育むための環境を整備する。 重点項目⑥	森（Mガーデン）を活用した自然活動の実施（3年計画の1年目）	<ul style="list-style-type: none"> 森での活動を通し探究的な学びを深め、SDGsへの関心を高める。 森の敷地内で屋内活動場所を整備し、子どもたちの学びの活動環境を整える。 職員研修を実施し、森の活動についての理解を深める。 保護者の理解と協力を得るように働きかける。（情報提供、ボランティア） 	○	<ul style="list-style-type: none"> 森の活動においては、蛇や蜂などが活発に動く時期を避けながら、季節に合わせたアクティビティを行うことが出来た。森で出会った様々な登場人物を、地図や季節ごとのグラフに書き起こし、森の1年間を探究することが出来た。 また5歳児クラスは春と冬に分けて保護者にも森の活動に参加していただくことができ、森の魅力や学びが共有される喜びを味わった。 今後は、森の家を探究の学びの場として、整えていきたい。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 日常の生活空間（園舎、園庭）を離れて、自然にふれあう中で感じられる活動は、貴重な体験になることと思われる。定期的に、「森」での活動に取り組みされていることを聞き、子どもたちの表情にどのように変化を見ることができのかが関心をもった。 子どもたち、保護者、あるいはスタッフが、どのような「喜び」を感じられたのかが分かる報告を聞きたいと感じた。

重点課題	基本目標	行動目標	個別行動目標	具体的な取組み	自己評価	評価のポイント	学校関係者評価	評価の要点・意見等
特色ある保育の展開	大学や地域の専門家・専門機関との連携により学問的根拠に基づく保育の展開を行う。	発達に関する課題に沿って、大学や専門家と共に実践的研究を行う。	運動遊びを通して身体的発達を促す。	<ul style="list-style-type: none"> 室内・屋外遊具などでの遊びを中心に、身体的機能を高める遊びを保育に取り入れて実践する。 運動発達の測定を行い、育ちについて可視化し、保護者にフィードバックする。 感覚－運動発達がどのように認知、非認知能力と関係するか、その道筋をたどり各年齢の保育でどのような手だてをとると良いのかを研修する。 (講師：聖隷クリストファー大学 和久田佳代准教授、伊藤信寿教授) 保育の在り方について考察し、保護者と共有する。 	△	<ul style="list-style-type: none"> 毎年恒例の体力測定については、これまでのデータの解析が滞っているため、今年は見送りとなった。次年度は、大学と新たなテーマを掲げて研究していきたい。 	△	<ul style="list-style-type: none"> 大学や専門家(外部)と共に取り組む項目であるため、園としての課題のみではなく、様々な課題があるだろうと推察する。子どもたちの運動面、それに伴う心理的側面の現れのどの部分に着目するかを、専門家に指導助言してもらいつつ、保育者の気づきとして整理し、質的研究として評価することができれば、保育者として研究成果としてまとめることができるのではないかと思った。 コロナ禍により5歳児の3年間での成長の遅滞が見られたという研究報告がある。こうした研究報告も踏まえて、コロナ明けにどのような環境や活動といったことが保育の質を高めることになるのか大学との共同研究が進められたら非常に興味深いものになるだろう。
		発達に関する課題に沿って、大学や専門家と共に実践的研究を行う。	言語・想像力を獲得するための取組み	<ul style="list-style-type: none"> 絵本や物語を楽しみながら遊びの世界を広げ、言語感覚・想像力を育む。 高山静子先生(東洋大学ライフデザイン学部教授)の研修を基に、子どもの発達や保育のねらいに応じた絵本の選別や絵本を文化として捉えるための研修を実施し、職員間の共通認識を図る。(継続) 野藤弘幸先生(NPO 法人クローバー自立支援センターしまもと)の園内研修(年3回)を実施し、一緒にアセスメントを行い、子ども達に対する今後の捉え方・関わり方などについて理解を深める。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 今年の4月より各家庭に毎月1冊ずつ福音館の絵本を購入して頂いている。同じ絵本を園でも家庭でも繰り返し読むことにより、園と家庭、また友達同士が繋がり、物語の世界で遊びが繋がる喜びを味わった。また厳選された絵本の言葉は保育の中にも自然と浸透し、子どもの言葉や行動にも変化が見られた。次年度以降も継続し、園の文化としていきたい。 今年も野藤先生をお招きし、年に2回園内研修を行った。支援の必要な子どもの事例をあげ、実際に現場を観察しながら、個々によって異なる支援について学びを深めることが出来た。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 絵本の読み聞かせと、それを通しての保護者との時間と場の共有の中から、子どもたちの言語理解、共感を生み出す情動、関係性の変化を感じることができることは、子のみならず保護者、保育者の成長にもつながる。専門家からの助言を受けつつ、継続的取り組みことで保育者もまた、子どもたち一人ひとりの変化への理解が深まることを期待したい。
	聖隷クリストファー小学校との接続を考慮しての教育内容を検討し、実施する。	国際的感覚や外国語に対する関心を広げる	PYP 認定校に向けて(3年計画の3年目)	<p>継続</p> <ul style="list-style-type: none"> PYP 認定申請のスケジュール作成(随時見直し・更新)、実施 異文化・異言語プログラム(活動内容)と環境(外国人講師の配置、室内環境等)の見直しを行う。 職員に対する PYP 研修の実施 小学校との PYP 教育プログラムの連携と協働 保護者への説明、地域のニーズ調査の実施 IB と SDGs の考え方を基に、キッチンとの連携による食品ロスについての学びを深め、具体的な取組みを検討し実施する。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 3月末には前年度のUOIの反省を生かし、全職員が一堂に集まり新たなUOIを作成した。4月からの実践については詳細にトドルに入力し、職員間で共有した。また、夏と秋には山梨学園を訪れ、PYPの実践を見学することで、更に学びを深めることができた。 11月の認定訪問では、小学校と協力してスクールビデオや言語ポリシー等の作成を行い、出来上がったものを保護者にも公開した。2月にはPYP校に認定されたとの連絡を受けた。 今後は、SDGsや聖句、歌、集団遊びなど、学年で経験してほしい具体的な活動をさらに加え、園独自のUOI(カリキュラム)作りを目指す。 こども園での学びが進学後も続くよう、連続したカリキュラム作成を小学校と協働して取り組みたい。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 将来の教育のあり方を問うなかから、新たな教育方針として示されたPYPの理念に沿って、着実に具体的な教育改革が進められていることを感じます。PYP校として認定されたことにプライドを持ちつつも、評価項目のための点数のみではなく、その実質的な意味について、繰り返し自らの実践を振り返りながら定着していくことを期待したいと思います。 PYPの有効性や実践上の課題を明らかにしていき、探究(好奇心・探究に対することも含めて)と全人教育を進める保育・幼児教育の実践研究提案をして欲しい。学会での論文や口頭発表なども視野に入れて、「働き方改革」とは異なる質の先生方の「働きがい改革」、キャリアアップも考えられるだろうか。

重点課題	基本目標	行動目標	個別行動目標	具体的な取組み	自己評価	評価のポイント	学校関係者評価	評価の要点・意見等
保育環境の充実	健全な発育・発達や充実した学びのための環境をつくる。	保育室の環境の見直し改善を図る 重点項目⑤	0～2歳児クラスの保育環境(育ちや学びを支える)について研修し、実行に移す。	<ul style="list-style-type: none"> 各保育者が園内研修から気づいたことをもとに、保育室の環境を改善させ充実させる。 満3歳児クラス拡充による保育室の再構成と、0～1歳児の保育環境の見直しを行う。 	△○	<ul style="list-style-type: none"> 未満児クラスは、一日の日課の見直しを行った。食事から睡眠へのスムーズな移行や、できる限り遊びを中断せずに、少人数でおやつを食べるなど、場所や時間、人数などに配慮し、日課の改善に取り組んだ。今後は1日を通した流れのある日課と、0歳から5歳まで継続した日課を作り、子どもたちが主体的に生活を送れるよう、検証していきたい。 年度途中ではあったが、布おむつから紙おむつへ移行したことにより、遊びの環境だけでなく、動線、時間の使い方などが大幅に変わり、保育者自身もお世話に追われることなく、子どもの遊び(環境)に目を向けることが出来た。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 乳幼児期の生活支援は、その発達段階において配慮すべき内容が大きく変わっていく。それぞれの年齢では、生活の中で感じ取れる世界の範囲が全く違うだろう。そのことを考慮した生活環境の改善に向けて、準備を進めておられることは大切であると思った。 新しい生活用品を取り入れるかどうかは慎重でありたいが、紙おむつはかなり一般的になっており、衛生面からも布おむつより優れているように感じる。保育者との関わりの面でもよい効果がでていっているように感じた。
子育て支援・保護者との連携	子どもの望ましい成長・発達について保護者の理解を促し、共に成長を支える。	日々の園での子どもの様子を丁寧に伝え、意見交換を行う。	ラーニング・ストーリーを活用する。	<p>継続</p> <ul style="list-style-type: none"> 個々の子どもたちのラーニング・ストーリーから育ちや学びを捉え、保護者懇談会の資料として活用する。保護者からのフィードバックも参考にしながら、次の保育の手立てを考える。 ドキュメンテーションやブログなど伝える情報や頻度に応じた媒体を検討し、書き方や作成の職員研修を実施する。 	○	<ul style="list-style-type: none"> ラーニングストーリーは、保護者面談等で活用することが出来た。 また未満児クラスでは、スライドショー、ドキュメンテーションなどを通して、日々の遊びや生活の様子を保護者と共有することに成功した。 しかし、毎日の連絡ノート、ラーニングストーリー、ドキュメンテーションなど、いくつもの保護者共有ツールがあるため、保育者が時間に追われてしまったことも事実である。今後は業務を整理し、タイムリーに子どもの育ちを共有できるシンプルな方法を考えていきたい。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの成長、変化を子ども自身の心の動きを思いつつ理解しようとする姿勢は大切にしたいと思っている。目に見える現れの一つ一つにその子の物語があることを、保護者とも共有できることは嬉しいことだと思う。 しかし、保育者が捕らえたストーリーが、子どものすべてだと勘違いしてしまわないように注意したい。子どもの現れの「不思議」「不可解」もそれはそれで受容したいと思っている。ラーニングストーリーについて繰り返し伝え、投げかけていくことで、徐々に文化として根付いていくのではないだろうか。 先生方や保護者の負担感に課題があるとするれば、ラーニングストーリーの適切なバランスや運用方法など整理されるとよいと思う。
	保護者や地域子育て家庭のニーズを理解し、適切な子育て支援内容を計画・実施する。	子育て支援の充実 重点項目④	子育て支援環境の整備、支援内容の充実	<ul style="list-style-type: none"> 0～2歳児の定期的な受入れを行い、1号認定入園につなげる。 プログラム・環境の整備を行う。 担当者の研修を行う。 学童保育実施に向けての検討 	△○	<ul style="list-style-type: none"> 子育て支援については、前年度よりも回数を増やし、水曜、金曜の2回、親子ひろばを開催している。魅力的なイベントなどを計画したことにより、リピーターも増えた。次年度は更なる支援事業の拡大を目標に、浜松市の「子育て支援ひろば」に応募したが、不採択となった。しかし今後も、自園のやり方でひろばを開き、孤立する親子が出ないように、また相談窓口や憩いの場所となれるように、地域に愛される「かかりつけの広場」として活動を続けていきたい。 また園とひろばを繋げ、園児募集にもつなげたい。 	△	<ul style="list-style-type: none"> 浜松市の「子育て支援ひろば」の認定を受けられなかったのは残念であったが、地域支援(地域福祉)は、従来の枠組みの中での取り組みに行政が予算をつけて実施するという発想そのものに限界があると感じている。 保育の専門家が、子育てにかかるニーズの相談窓口になれる(かかりつけの広場)という発想は的を射ている。ソーシャルワークのできる保育士の配置はどの園にも期待したい。 そのために、地域の保健師や要支援家庭をサポートするソーシャルワーカー等から学んでみてはどうだろうか。 大学側でも将来構想の一つとして視野に入れている点である。共に進められたらと思う。

重点課題	基本目標	行動目標	個別行動目標	具体的な取組み	自己評価	評価のポイント	学校関係者評価	評価の要点・意見等
入園児募集	<p>聖隷学園やクリストファーこども園の保育が地域や保護者にさらに理解されるように働きかけ、共に子どもの育ちを支える意識を高める。</p>	<p>定員の確保・説明会、見学会等の実施。広報（ホームページ等）</p> <p>重点項目③⑧</p>	<p>ホームページ・ブログ等を活用した募集・広報活動の強化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ICTに関する専門的な技術・知識を活用して、ホームページやブログの配信など、ステークホルダーに届く広報活動を展開する。 ホームページの内容を随時見直し、閲覧者が園や学校に足を運ぶよう工夫する。 ホームカミングデーの実施、インスタグラムを活用し、小中高大接続を意識した広報活動を行う。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 年度途中からではあるが、『クリストファー新聞』と名づけ、専門スタッフが日々の活動をブログとインスタで発信した。 入園説明では、入園の時期がそれぞれに異なるため、大きな説明会以外にも、小さな説明会や案内を複数回に渡り行った。また対象を広げ、一つ下の学年も説明会に招き、早めに接触して園を公開した。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 基本目標にある「さらに理解されるように働きかけ、共に子どもたちの育ちを支える意識を高める。」となると、理念やそれに沿った取り組みについて、じっくり伝える必要があるように思う。ホームページのような電子媒体よりは、機関誌、小冊子などの紙媒体の方がよいかも知れない。 保護者から出された「文字が多い」「少し敷居が高く感じられる」といったことも踏まえて、写真や図などを大きくして、文字は少なくした新聞などのあり方を考えられてはどうか。全てを新聞で伝えようとはせず、園内の掲示(例えばドキュメンテーション)なども含めて効果的で効率的な取り組みを今後さらに期待する。
安全管理・危機管理	<p>災害時や園児の病気・事故、不測の事態に備えて、具体的な対応策の確認と訓練の実施</p>	<p>不測の事態・危機管理体制の充実を図る</p>	<p>保育安全マニュアルの見直し・更新を行う</p>	<ul style="list-style-type: none"> 随時保育安全マニュアルの見直しを行う。 各訓練(防災、不審者、園バス運行、園外保育など)の実施と役割の明確化、訓練後のマニュアル更新と職員への共有・周知を行う。 不測の事態に備えた保護者への速やかな連絡システムの構築 	△	<ul style="list-style-type: none"> 保健ルームからは、感染症(インフルエンザ、アデノウイルス、溶連菌等)の速やかな情報発信を行うことが出来た。 不審者訓練では、不審者が現れた時の音楽を子どもたちと共有した。 今後、南海トラフに備えて、園の環境を見直す必要がある。また訓練も気を抜かず、一人一人の保育者も、子ども自身も、自分で考えて行動する場面を意図的に作っていく必要がある。3学期には全体の訓練の見直しを行い、実行していく。 園バスについて、安全装置の取り付け、園児と職員に研修を行った。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 様々なリスクを予測して対応を考えておくということにつきると思う。そして、関係者がその対応方法を共通理解し、予め決められた手順について行動できるように準備したい。 様々なリスクを考える上で、広く関係者から考えられるリスクについての情報を上げてもらうところからはじまるのではないかと思っている。
スタッフの資質向上・連携	<p>保育・教育専門職者として意識を持ち、研鑽に努める。</p>	<p>主体的な研修と学びの促進</p> <p>重点項目⑨</p>	<p>各職員のキャリアアップのための、自発的な研修を促す。</p>	<p>継続</p> <ul style="list-style-type: none"> キャリアアップに係る自主的な研修の受講の支援(費用、勤怠の調整等) クリストファー大学主催のIBECプログラムへ職員の受講促進(2023年度受講者:7名) オンラインによる研修の実施、研修視聴環境の整備 資格取得支援 	○	<ul style="list-style-type: none"> 可能な限り、職員が積極的にキャリアアップ研修を受講できるよう手配した。 今年も、幼稚園免許取得者や、保育士資格を目指す職員が出た。 オンライン研修を、どの時間帯でも受講できるように、配信した。 7名の保育者がIBECの科目履修を受講している。夕方からの受講に向け、食事の提供などの支援を行った。 	○	<ul style="list-style-type: none"> 基本目標にある「保育・教育専門職者として意識を持っての研鑽」は、IBECプログラムのみではないと思うが、園(法人)の事業方針を理解し、複数名の職員が自主的に学んでおられ、そのための支援体制についても配慮されていることは園としての嬉しい成果だと思う。 先進的で挑戦的な園に勤められている先生方の日頃の努力に敬意を表しつつ、実践を振り返り、整理し、発表されることも取り組んでもらえたらと思う。大学と連携して実践研究が進められるように大学教員側も意識をさらに高く持ちたい。

重点課題	基本目標	行動目標	個別行動目標	具体的な取組み	自己評価	評価のポイント	学校関係者評価	評価の要点・意見等
スタッフの資質向上・連携	保育・教育専門職者として意識を持ち、研鑽に努める。	主体的な研修と学びの促進 重点項目⑨	園内研修を定期的に実施する。	継続 ・園で定めるテーマ（自然活動、言語・想像力の獲得）に関する研修への職員の積極的な派遣	△	・はごろも教育研究助成賞で受賞した『自然との共生』をテーマに、講師とズームで今後の研究方法についてのディスカッションをした。 次年度は、園全体で取り組みたい。	△	・PYPの学びとともに、自然体験を通しての保育も、園の特長としたい項目だとすると、ぜひ続けて、園全体での学びにつなげていってほしいと思った。 ・素晴らしいことだと思うので、こうした研究成果を、聖隷国際教育学会でも発表いただきたい。
		保育者としての責務と倫理を理解する。	園児や保護者との適切な関わりについて共通理解を図る。	・人権を尊重した関わりの共通理解と実践 ・講師を招いての園内研修（ハラスメント研修を兼ねる）の実施 ・人権擁護のためのセルフチェックリストの実施と園全体での振り返りを行う。	○	・クリストファー大学の内山敏先生をお招きし、夏の研修で、『ディファレンシエーション（多様性）』と『ハラスメント』についての研修を行った。 ・人権擁護のセルフチェックと研修会を実施し、職員各自と園全体の振り返りを行った。（1月実施）	○	・臨床心理士の専門性からの学びは、人権尊重という視点に留まらず、子ども（保護者）、あるいは保育者間の人間関係を見直し、よりよいコミュニケーションを促し、あるいは回復するためのヒントになると思う。
園経営全体の向上	働き方改革一定時退勤を目指して、タイムマネジメントができるように支援	学園の働き方改革推進	保育準備・事務的作業の環境整備 ICTの活用	・ICTを活用した情報共有や記録の一元化を進め、会議や記録等の簡略化を行う。 ・ネット環境を整え、園内でのICT作業の効率化を図る。 ・タイムマネジメントを意識した個人作業スペースの整備を行う。 ・ノンコンタクトタイムの確保と勤務時間内での作業効率化	△	・職員の休憩がコンスタントにとれるよう、職員の要望を聞きながら、第二休憩室を整えた。しかし、休む職員の補充などで日課が崩れ、休憩がとれない日も多くあった。引き続き課題である。 ・Wi-Fi環境を整え、ICT作業の効率化を図ったことにより、各保育室からでもスムーズな作業ができるようになった。タイムマネジメントについては全体としてなかなか向上しない。園全体の大きな課題として細かく分析し、引き続き検証していく必要がある。	△	・労働環境について考えるときに、法的な規制（行政の意向）に添うことは、制度上は求められるが、実際に働く人たちの立場で考えると、必ずしもその心情に添っているとは思わない。働く人たちの立場に添った配慮は必要だと感じているが、むしろそれぞれのモチベーションを受けとめられるように、そしてそれは、労働条件がすべてではなく、自分の仕事の意義、やりがいを感じられるかどうかが大切だと思っている。 法的（制度的）に求められることと、実際の働く人たちの働きやすさとの狭間で、管理的な立場にいる人たちが、双方の意向に添いたいと思うほどストレスを感じているのではないだろうか。 ・体制やシステムの整備と合わせて、働き方の意識を変える方向性も必要かと思う。別のところでも触れた「働き方改革」と合わせての「働きがい改革」である。